

# こどもの発達と家庭支援③④

～ 生涯発達 ～

# 成熟・成長・発達

## 「成熟」

元来持っていたものが、年齢とともに次第にあらわれてくる  
といった意味合いが強い

## 「成長」

年齢にともなう身体的・精神的な変化をあらわす

## 「発達」

身体の量的変化だけでなく、

「\_\_\_\_\_」の質的な変化も重視する

そして、発達は成人になるまでに限らず  
一生涯にわたって「\_\_\_\_\_」という視点で捉えられる

# 保育者が心理学を学ぶことの意味は？

- ✓ 保育者がかかわる子どもは、  
様々な機能を急速に形成・獲得していく時期にある（特に乳幼児期）
- ✓ 子どもたちの発達の変化に寄り添いながら、支援を行うためには、  
子どもの「\_\_\_\_\_」について十分な知識をもっている  
必要がある
- ✓ 保育者として発達を学ぶことの意義（相良2013）
  - ① 子どもの安全に配慮した保育をするために役立つ
  - ② 子どもの発達を学ぶことで子どもの理解がすすみ、  
子どもの成長ぶりに気がつく機会が多くなる
  - ③ 保育の現場でみられる子どもの「困った行動」とみなされる  
行動について、なぜそのような行動をするのか、どのような  
メッセージやサインをおくっているのか考えるときに役立つ
  - ④ 保護者に対して適切な支援をするために役立つ

# 発達には「\_\_\_\_\_」と「\_\_\_\_\_」がある

## ✓ 運動発達面の順序性

寝返り → お座り → ハイハイ → つかまり立ち

→ つかまり歩き → ひとり立ち

## ✓ 言語発達面の順序性

喃語（「アーウー」「ぶーぶー」など）

→ 初語（「マンマ」「ママ」など）

→ 一語文 → 二語文 → 多語文

## ✓ 発達の方向性

中心部から末梢部へ、

頭部から脚部へという一定の方向性がみられ、

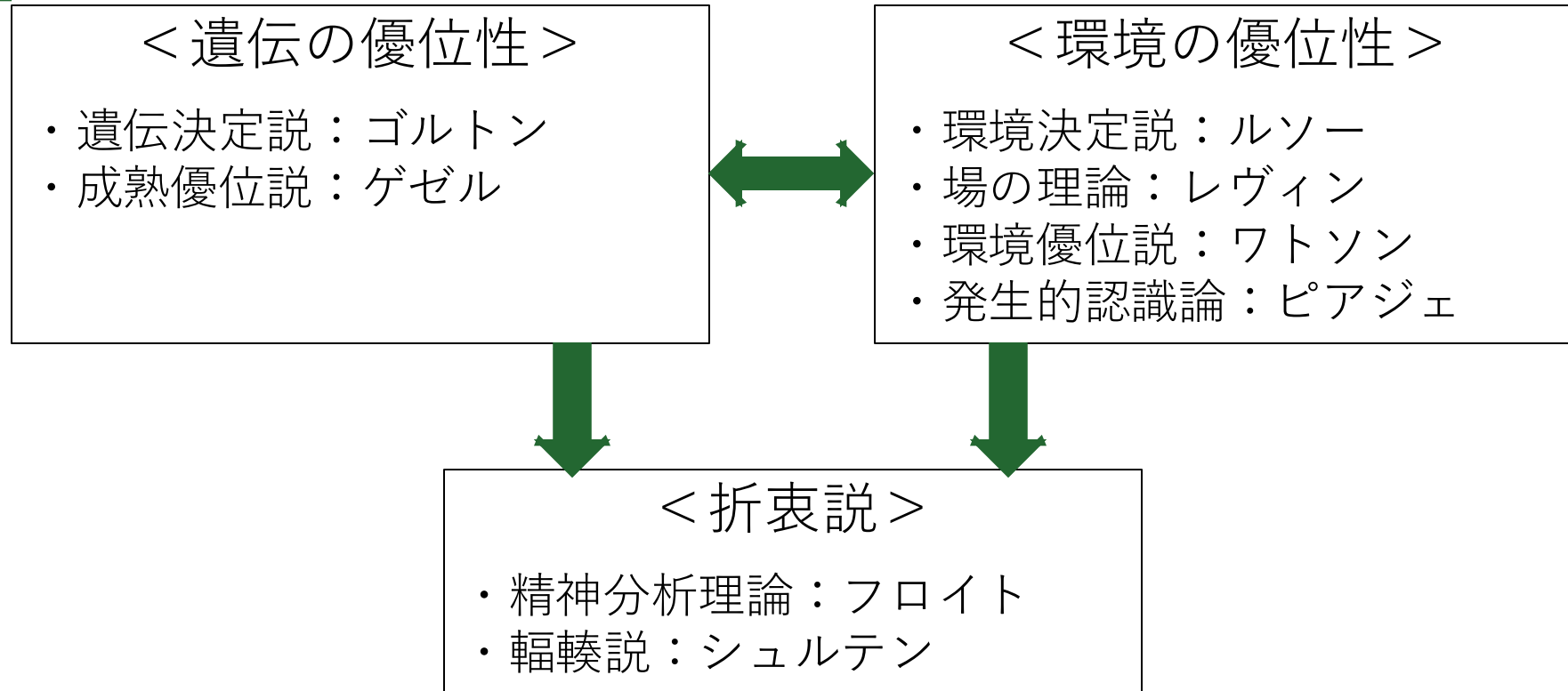
発達は頭から足の方へ進んでいく

# 生涯発達を理解するということとは？

- ✓ 人は生まれながらにして社会的存在であるといわれる
- ✓ 人との関係のなかで生活し、発達していくことがヒトとして生まれ人となっていく上で、大切なことである
- ✓ 「\_\_\_\_\_」は子どもの生活基盤であり、そこでは夫婦関係、親子関係、きょうだい関係が同時に展開していく
- ✓ 保育現場から子どもを理解していくためには、↑の関係を個別に扱うのではなく、家族を一つの「\_\_\_\_\_」として捉え、家族関係のダイナミクスのなかで子どもが発達していく様相を理解していくことが重要となる

家族を理解する視点として、  
「\_\_\_\_\_」の発達課題についても理解しておくことが大切

# 遺伝と環境をめぐる発達観



現在もはっきりした結論は出ていないが  
「折衷説」を支持する立場が一般的となっている

- ✓ 遺传的決定説：人間の能力は出生のみに依拠し、教育の機会によるものではない
  - ✓ 成熟優位説：双生児の実験から、発達は個体自体が生得的に有しているメカニズムの支配が強く、教育訓練効果は準備性（レディネス）が高まる年長者ほど高い
- 

- ✓ 環境決定説：子どもの可能性と実現は教育（自然教育）によって決定する
  - ✓ 場の理論：学習は、認知構造の変化によるものであり、行動は人格と環境の相互作用によって決定される
  - ✓ 環境優位説：行動主義の立場から、人間は条件付けによって発達する
  - ✓ 発生的認識論：発達には、環境と個々の相互作用が大きく関わっている
- 

- ✓ 精神分析理論：乳幼児期の体験が、成人となっても大きな影響を与えている。
- ✓ 輻輳説：双生児の実験から、人間の発達は遺传的・素質的な因子と環境的因子の相互交渉（輻輳）の結果である

# 発達段階と発達課題

- ✓ 質的变化は、身長の変化のように徐々に変化していくものではなく、それぞれの時期でそれなりのまとまりを持った姿を見せながら進んでいく



発達段階が想定されることになる

- ✓ それぞれの「\_\_\_\_\_」には、  
その段階ごとに乗り越えなければならない  
「\_\_\_\_\_」が設定されている

その時期に必要な課題を乗り越えると  
次の発達段階へ移行していく



# 年齢・時期による発達の段階

期

受精から出生までの期間  
胎生期ともいわれる

期

出生から4週間の時期をさすのが一般的

期

生後1か月から1歳、もしくは1歳半までの時期

期

1歳、もしくは1歳半から5歳までの時期

期

6歳から11、12歳まで。  
小学生に該当する

期

12,13歳から22,23歳まで  
中・高・大学生に該当する

期

23,24歳から40歳代前半まで。  
壮年期ともいわれる

期

40代から50代までの時期

期

60代以上の人を対象とする  
(65歳以上をさすことが多い)



# アタッチメント理論 ( John Bowlby )

- ✓ 乳幼児が養育者に対して形成する「\_\_\_\_\_」や「\_\_\_\_\_」のことをアタッチメント (愛着) という
- ✓ 乳幼児の後の人格形成には**養育者**とのアタッチメントが大きな影響を与えることを理論化した
- ✓ 特に、「\_\_\_\_\_」までの時期が重要になるとされている
- ✓ アタッチメント理論の中心となるのは、「\_\_\_\_\_」である



アタッチメントの対象との関係を通して、  
自らの中で形成される「\_\_\_\_\_」および  
「\_\_\_\_\_」である

# 愛着行動の発達段階

段階	時期	愛着の対象	行 動
第1段階	出生 ～ 3ヶ月	決まっていない	①出産後の1時間以内に「抱く・抱かれる」ことで母子相互間に「特別な関係」が出来上がる
第2段階	3ヶ月 ～ 6ヶ月	特定の人 (1人～数人)	②その後、6ヶ月までの間に、泣いたら来てくれたり、見つめ返してくれたり、不快を取り除いてくれたりしてくれたりされることで「特別な関係」を強める ③特別な人以外には「人見知り」をするようになる
第3段階	6ヶ月 ～ 2,3歳	知っている人と知らない人の区別がつく	④母親と離れることを恐れるようになる(母子分離不安) ⑤母親からの愛情を貯め込み、肌から離れる準備を始める
第4段階	3歳頃 ～		⑥母親が「そばにいてくれれば安心」「見ててくれていれば安心」「泣いたら母親の元に走ってなぐさめてもらえたらまた離れる」という小さな自立をくり返す(飛行場現象)

# アタッチメントの重要性

正常に形成された  
子ども

正常に形成さなかった  
子ども

困難に  
ぶつかったとき

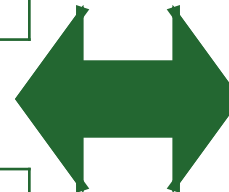
泣いたり怒ったりせず、  
その場にいる大人に  
助けを求められる

泣き叫んだり、  
大人の手助けを拒否し  
たりして、  
あきらめてしまう

幼稚園での様子

他の園児との人間関係  
が上手にもて、意欲が  
ある

人間関係が乏しく、  
新しいものへの興味や  
意欲に欠ける



乳幼児期に良好なアタッチメントを形成できた場合・・・

その後の人生において、基本的に、自分を「信頼される人物」と思い、他者を「この人は自分を信頼してくれる」というモデルによって対人関係を構築する

アタッチメントを築けなかった子どもの場合・・・

人格形成の核になる「\_\_\_\_\_」や「\_\_\_\_\_」が獲得できず、成長に伴って、人格障害や、依存症などの精神的な課題をもつようになりやすいことが指摘されている

乳幼児期に被虐待経験を持つ人は、

「\_\_\_\_\_」や「\_\_\_\_\_」において困難を持ちやすくなる

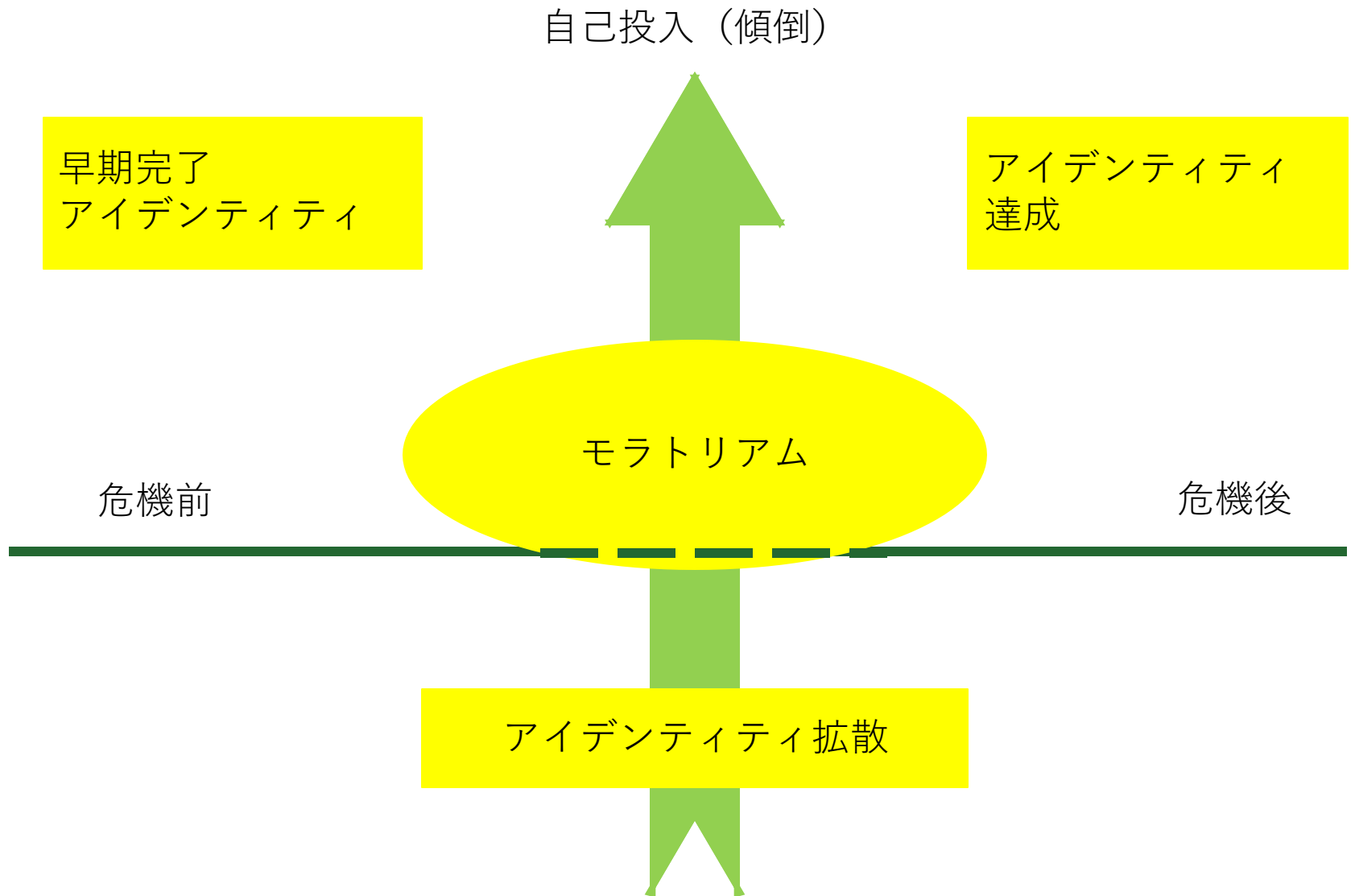
# エリクソン (Erikson, E.H) の発達段階

- ✓ エリクソンは人生を8段階に分け、  
それぞれの発達段階で達成すべき発達課題を提起
- ✓ 発達課題には、解決に成功した時の心理・社会的な健康と、  
失敗した時の心理・社会的な病態が示されている

	発達課題	課題を達成して 得るもの	失敗した場合 の状況
①乳児期 0～2歳	母親などの養育者との関係を通じた基本的信頼感	信頼・希望	不信
②幼児期前期 (幼児期) 3～4歳	自分の身体を自分でコントロールする自律感	自律性	恥・疑惑
③幼児期後期 (遊戯期) 5～7歳	自発的に行動する快感を覚える	自発性	罪悪感

	発達課題	課題を達成して 得るもの	失敗した場合 の状況
④児童期 (学童期) 8～12歳	様々な活動を通じた 勤勉性	勤勉性	劣等感
⑤青年期 13～22歳	アイデンティティ (同一性) の確立	自我同一性	自我同一性拡散
⑥成人初期 (全成人期) 23～34歳	親密な人間関係の構築	親密性	孤独
⑦成人期 (成人期) 35～60歳	子育て・仕事など 社会的な役割を通じた 次世代の育成	生殖性 次世代育成能力	停滞
⑧成人後期 (老年期) 61歳～	人生の意味をまとめる	自我の統合	絶望

# アイデンティティ・ステイタス ～アイデンティティ形成の達成度～ (J.E.Marcia)





# アイデンティティは 確立できているでしょうか？

あてはまるものにチェックしてみてください

- ときどき自分がどんな人間かわからなくなる
- 異性とデートしたりすることはめったとない
- 今の自分は本当の自分ではないと思う
- 自分に自信をもてないことがある
- 自分がどう生きればよいのかわからない
- 不安に思うことがたくさんある
- 自分の考え、価値観が正しいかどうか迷う
- ときどき無責任な行動をとってしまうことがある
- 困ったときには親など身近な人の考えに従う
- 自分が本当にしたいと思うことが見つかっていない

参考：手にとるように発達心理学がわかる本（かんき出版）

ティティ ステイタス	危機	積極的 関与	内 容
(アイデンティティが 確立できている状態)	経験 済み	している	自分の人生や価値観について悩み、 苦しんだ結果、自分の考えを持ち、 その考えに伴って行動ができている。 かつ、自分はどんな存在なのかを理 解できていて、自己の短所・長所も 理解できている。
(アイデンティティ達 成の途中段階)	その 最中	しようと している	まだ自分のアイデンティティ形成に 至っておらず、様々な課題に対し、 迷いがある状態。
(他者の価値観・考え を自身のアイデンティ ティとして受け入れた 状態)	未経験	している	仕事や勉強など自分の役割に対し積 極的に関与できている。他者（親 等）から与えられた課題をこなすこ とはできているが、それが自分に にとってどんな意味があるのか、を考 えるに至っていない。

ティティ ステイタス	危機	積極的 関与	内 容
(自分が誰かわからない、アイデンティティを確立できない状態)	未経験	していない	<p>危機前</p> <p>危機を体験したことがなく、積極的関与もしていない。自分が何者なのか、考えるに至らない状況。</p>
	経験済み	していない	<p>危機後</p> <p>危機は経験しているが、まだ何かに対して打ち込む等、積極的に自ら行動ができない。</p>

# 一般的と言われる主な発達諸相

## ✓ 乳児期

生まれてすぐから言葉（意味と音声結びついた初語）が出る時期、または離乳がほぼ完了する（1歳から2歳くらい）までで、歩く、話す（意味が伝わる）、食べるなどの基本的な行動ができる頃までを指す。

## ✓ 幼児期

小学校に入るまでで、よちよち歩きの時期から生活上の自立（排泄、歯磨き、食事、入浴）の獲得の頃までをいう。

また、幼稚園や保育所での社会生活での適応、そのためのしつけや主体性の発現、友達との交流力などが発達する期間。

2、3歳では第一次反抗期といわれる自我の芽生えが起こり、

「いや」を連発したりするが、これは自己主張の発想である。

好奇心が旺盛になり、遊びも盛んになる。

## ✓ 児童期または学童期

小学生の時期で、主に学習の習慣を身につけ、基本的な社会生活に必要な知識を学ぶ。または体力を養い、走る、跳ぶ、投げる、回転するなどの運動技能も巧みになり、さらに球技などの技も磨かれて盛んになる。

心身ともに安定した生育期である。

思考面では、具体的、客観的な思考ができるようになり、平和や愛などの抽象的な言葉も理解するようになる。

集団生活での役割や規則などの社会性も身につくようになり、勤勉な精神や劣等感の克服への努力などが獲得されていく。

## ✓ 思春期から青年期

性的成熟を受け入れ、それまでの発達を社会的な自立へと結びつける時期。

思春期では第二次反抗期と呼ばれる心理的な離乳も起こる。

親よりも友だちを大切にしたり、仲間意識をもったりして集団でのスポーツや遊びを楽しんだり、鍛えたりする。

青年期（高校時代から大学時代）では、自分の性格や好み、能力などを理解し、自分に合った職業で、しかも社会が必要としている仕事を見つけ、社会人として勤労していく喜びも（アイデンティティの獲得）得ていく

## ✓ 成人期

青年期以降の老人期または老年期までの間の期間で、個人差が大きいですが、就職や結婚、親になること（子育て）などの社会的な役割や課題が多い時期。パーソナリティは安定していることが多く、異性との親密な関係も継続されることが多く、仕事にも慣れ、安定した社会生活や個人生活をしていることが多いが、現在では成人期半ば（40代）の離婚、リストラ、挫折などの問題も増えてきている。

特に、人生の折り返し点などの意識も起こり、やり残した課題が思い出されてきて、「もっと別な人生だったはずだ」とか、「本来の望んだ仕事ではなかった」などの後悔から、生き方を変えようとする選択が起こることもあり、人生のターニングポイントになったりしている。

## ✓ 老年期

老人期ともいわれるが、個人差が大きいにせよ、老化の進行が否定できない時期。

例えば、物忘れや聞こえにくさ、足腰の痛さなどと付き合いながら、心身機能の衰えを組み込みながら、いかに社会的活動を変化させていくかが課題ともいわれる。

多くは、定年による社会的役割からの引退、経済力の縮小、子どもの自立などにより、仕事関係の友達から地域や趣味友だちへの移行、仕事中心からゆとりある社会生活への移行などが起こる。

自分のこれまでしてきたことや生きてきたかかわりを内省し、

統合していく時期。



# 発達の諸要素と全体性

## ①認知発達視点

(ピアジェなど)

## ②知的発達

(対象認知、注意の発達、記憶や概念、問題解決、知能)

## ③コミュニケーションの発達

(言語、会話、日常言語コミュニケーション)

## ④社会性の発達

(遊び、対人関係、自己意識、役割行動、道徳性など)

## ⑤情緒

(感情や愛情なども含む)



内的作業モデル (理性や目標に対して働きかけるためのプランであり、  
多くは養育者との関係のあり方で身につけられたプランモデル)

# 発達とは、内的作業モデルの側面だけ？

内的作業モデルの側面だけでなく、

- ・瞬発力や開眼（閉眼）片足立ち、垂直跳びなどの運動能力や柔軟性が、心理的な発達とともに発達する
- ・身体の運動を促進する適度な活動が筋力を高める

人の発達では

知的側面・感覚器官・運動器官など

さまざまな機能を使わなければ心理の発達もない

# 各段階における発達課題

## ～発達課題とは～

- ✓ 発達課題とは、各発達段階において解決しておくべき心理的な課題
- ✓ 発達課題が解決されていると発達は順調に進み、発達課題が解決されていないと後に困難な問題に遭遇する
- ✓ ハヴィガースト（Havighurst, R.J.）は、発達課題の発生は次の要因にあるとしている
  - ①身体的な成熟
  - ②社会・文化からの要求・圧力
  - ③本人の欲求（努力・目標）
- ✓ 発達課題には、各段階で外部からの刺激として、働きかけが必要である。また、達成状況は評価が可能である

# 乳幼児・児童期の発達課題（～11歳頃）

- ✓ 乳児期における主な発達課題は、「\_\_\_\_\_」である。  
絆の形成とは、子どもの泣き・笑いといった生得的な行動に対して、  
養育者が反応すること
- ✓ 幼児期における主な発達課題は
  - ① 「\_\_\_\_\_」：親にしてもらうのではなく、自分でする行動  
が多くなるこれは自己認識が発達するからである
  - ② 「\_\_\_\_\_」：基本的な生活習慣を獲得して、社会の一員とし  
ての要件を確立していく。これは準拠する集団に適応し  
ていくための規範づくりである
  - ③ 「\_\_\_\_\_」：認知能力の発達により、他者が自分に何を期  
待しているのかがわかるようになる。他者の期待に対し  
て感情表出などによる反応を示しながら、基準を獲得し  
ていく

✓ 児童期における主な発達課題は

- ① 「\_\_\_\_\_」：学校や地域集団を通じて、集団内での行動基準の獲得をしていく
- ② 「\_\_\_\_\_」：男の子は父親を通じて、女の子は母親を通じて性役割を獲得していく

# 青年期の発達課題（11歳頃～25歳頃）

- ✓ 近年は、文明の発達などの社会的変化により、青年期の期間は拡大傾向にある。したがって、従来より青年期を迎える時期がやや早くなり、青年期を終える時期は遅くなってきている
- ✓ 青年期における主な発達課題は
  - ① 「\_\_\_\_\_」（自我同一性）の確立：  
自分は社会の中でどのように生きるのかという課題に出会い、真剣に模索しながら自分がどのような存在なのか理解する
  - ② 「\_\_\_\_\_」：自らを社会の中に位置付けていく個性化が求められると同時に、社会からの期待を受けとめ役割を獲得していく社会化が求められる時期  
(ハウィガースト)

# 成人期の発達課題（25歳頃～65歳頃）

✓ 成年期における主な発達課題は

- ① 「\_\_\_\_\_」：成人期は、確立されたアイデンティティに基づいて、働きかつ子どもを育てる
- ② 「\_\_\_\_\_」：40～50歳になると心身の機能低下に直面するため、新たな価値観の獲得が求められる

# 老年期の発達課題（65歳頃～）

✓ 老年期における主な発達課題は

- ① 「\_\_\_\_\_」：自分の人生を有意義なものとして肯定的に受けとめる
- ② 「\_\_\_\_\_」：  
老化に適応して快適な人生をおくること